

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第4回）「キャリア教育の推進」部会 要点録

開催日時	平成21年8月31日(月) 午後3時30分～午後5時45分	
会場	練馬区役所本庁舎12階 教育委員会室	
出席者	委員	廣嶋憲一郎、小野雅保、石井友行、岡本昌子、安井実、根本裕美 飯塚剛、野田恵威子、望月徳生、高橋吉久（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	芝田智昭 指導主事

1 はじめに

事務局

資料の確認。キャリア教育推進部会協議資料、A4表裏。それから（5）キャリア教育のカリキュラム（A3）それから「上石中 小野校長先生より」。それとキャリア教育の推進部会第3回の要点録。修正等がある場合は、今週中に私宛てに。最後に、「小中一貫教育校だより」。

本日の検討事項。一つ目が、各学習期における目指す子ども像。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の子ども像を今日ある程度、方向性を確定したい。二つ目が、全学習期を通じて学習する内容。キャリア教育にかかわる、繰り返し指導する内容について。三つ目、「キャリア教育のカリキュラム」。これまでの協議で三本の柱、「自立を育む」、「勤労観・職業観を育む」、「自己肯定感を育む」、そして特別支援学級の実践等も入れた形で整理をした。これをさらに充実したものにしていくとら考えている。

まず「協議資料」について説明する。キャリア教育について、ある程度指導項目のようなものは見えてきたが、やはり小中一貫教育とはどのようにとらえるのかとか、四つの重視する事項をどのように位置づけたらいいのか、確認したい。これまで教育委員会から公式なものとして公表しているのが、「小中一貫教育推進委員会の答申」（20年3月）。それを受けて、「小中一貫教育校設置に関する基本方針」（20年11月）。それに立ち返って押さえられたらということ。で抜粋をしたもの。まず、小中一貫教育校の教育方針。〈内容確認〉次に「キャリア教育の推進にかかわる小中一貫教育カリキュラムの作成方針」。〈内容確認〉学ぶことや働くこと、生きることを実感し、将来について主体的に考えることができるような体験活動が重要であることから、地域社会にある様々な事業所、施設、官公署など、地域社会の教育力も活用し、9年間を通して組織的・系統的なキャリア教育を実現していくというもの。

「小中一貫教育校の構想図」左側、縦軸に、「特色」「学年」「段階」「発達の特徴」「指導の重点」「指導体制」「教育方針」「学校経営」「施設設備」「就学」があり、今日の検討事項と特にかかわってくるのが、「発達の特徴」と「指導の重点」になるかと思う。

各学習期における目指す子ども像、全学習期を通じて学習する内容で考えたときに、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の「発達の特徴」、「指導の重点」が基本方針に端的に示されている。だから学習期における目指す子ども像は、この「発達の特徴」をふまえて、小中一貫教育校の「指導の重点」も反映させながら設定をしていく必要がある。ほかにも教育方針などが示されているので、この表が基本的な考え方の出発点になる。

以上が、方針と答申から抜粋した、特に重要と思われる内容。まずは検討事項の1番、各学

習期における目指す子ども像について。現段階では、石井先生の表の「全学習期を通じて学習する内容」に示されているところが、目指す児童像ともかかわっているのではないか。

2 協議

委員

事務局が作ったこの討議内容、討議資料を通じて、20年3月、20年11月の基本方針をふまえて、これに沿った内容の視点を常に意識しなければいけない。検討事項の(1)目指す子ども像。名称も、「児童・生徒」という言い方がどういう区分けで使われていくのか、よくわからない状態になりそうだ。子ども像ということによろしいか。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期について、自分たちがとらえているイメージを語らないと難しい。まず小学校のほうから、小学生4年生までを一区切りにしたⅠ期のイメージを語っていただきたい。中学校の方では、高学年のイメージは沸くが、低・中学年のイメージがあまりわからない。

委員

ほとんどの子が幼稚園、保育園を経験しているので、集団が初めての子は、今年度は一人もいなかった。まだまだ集団という意識が少ないし、やってもらって当たり前というのが1年生の最初。まず、場に慣れ、環境が変わってもそこで生きていけることを、1年生の最初に力をつけて「学校は楽しいね」と言える子どもにしたいということで、学校探検も何回もやってきた。その中で学習方法に関する気づきがあった。学校探検をして、探検という言葉で子どもに言ったとき、新しいことを知ってくるのが学ぶことだ、そのためにはよく見る、わからないことは人に聞くという2点を挙げた。それでうちの学級の学習目標として、その2点をいつも掲げて学習に取り組んでいる。人とかかわったりすることに安心すること、喜びを持つこと、自分でもできるという気持ちを持つことがまず入門期の最初の段階にほしい。

2年の後半ぐらいからは、学級のために自分のできることとか、学級活動でみんなで一つのことを作り上げる喜び、さらに自分たちの作り上げたものを人に知ってもらい喜び、伝える楽しさにまで進んでいける。まずは自分が知ったり慣れたりして、それを膨らませて人に伝えていくことが楽しいとか、うれしいとか、ひいては自分が成長しているのだという実感が持てるものが、低学年として大事だと思う。自分は自分、友達は友達、それが少しずつ自分を核としてつながっていく時期かと思う。その環境を作っていく時期。

委員

特別支援学級の子どもたちも集団を経験してきているが、障害のある子どもたちは、保育園に入ると特別枠、障害児枠ということで、自分と先生という形で集団参加をすることが多い。そこからそれぞれの形で就学、小学校に入って進路が変わってくる。その子の実態や保護者の意向、進路先を選択するにあたってはいろいろな価値観が入り混じる。だから、集団の中の一人なのに、先生の全体への働きかけに対して、高学年になっても自分と先生との1対1の関係をもっと要求してくるケースもある。集団の中で自分がどういう位置で、どういう行動、言動を求められているのかは、積み重ねていく中でやっていく。そこが指導形態の中で自分のあり方を求められてくると思う。指導内容になると、もっと習熟、定着を図るための反復がある。でも特別支援学級の子どもたち、学ぶのが当たり前と思っている子、自分に興味関心のないも

のに対しては外を向いてしまう子が多々いる中で、「学校って、勉強って楽しいな」「やってみたいな」という意欲を積み上げて、姿勢も前向きになるようなことを子どもに定着させるのが、I期でやっていかなくてはならないところかと感じた。3、4年になると、集団の形態、学習形態にも慣れてきて、その中で知的好奇心を駆り立てるような刺激を投じることで広がりや深まりの両方をバランス良く、子どもたちに要求することもできるようになるのかと思った。

委員

二人の先生のお話を伺うと、小学校生活に適応すること、場に慣れることにつながっている。「身の回りの事象への関心を高める」というのは、学校探検で「よく見て、よく聞け」「聞いたりしなさい」ということ。それから「自分の好きなことを見つけて、のびのびと活動する」は、そういった伝える楽しさと合っている。さらに飯塚先生の話の最後、「自分からやってみよう」というのは、「自分の持ち味を発揮し、中学年の役割を自覚する」とつながっている。石井先生が作ってくれた学習内容は、目指す子ども像と一致している印象を受けた。

委員

桜小・中での一貫の準備として、全先生方が集まったの会合をやった。そのときに思ったのは、小学校の低学年はまさしく父親・母親代わりの面が小学校の中にあるのかと。愛情と言えば愛情だし、母親の優しさというものを学校が肩代わりしていたのが、自立という中でどう対応していったらいいのか。中学校になると、先生を対応の人間関係に置き換えていって、3年生ぐらいになると大人のレベルの話をして、かけひき等もできるようになっていく。そういうことを小学校の先生との話で感じた。だから、小学校には小学校の、中学校には中学校の文化・対応があるので、そうした現状、先生方が普段どんなふうに接しているのかにもI期、II期、III期の見方のポイントが隠れている気がする。そういう中で、やさしい対応から、突き放しながらも自立させていくような、繰り返しの指導のポイントがあると思った。

事務局

目指す子ども像は学校における子ども像や人間形成上の子ども像ではなく、ここで考えるのは、やはりキャリア教育における目指す子ども像だと思う。

委員

微妙に難しい。どういうものを設定して、それに近づくために私たちが子どもと共にやっていくか。あと中学の場合、一応1年生は自分を見つめるところから始まる。自分とその他の人たちのいいところを見つけて、「人間って何か」みたいなことを1年生のうちにやって、基本的な生活習慣はもう一度押さえる。中学校の生活に必要なルールがあるから、しつけみたいに1年生はやる。2年生になると、自分と所属している学級とか学年とか、個と集団を考えさせる時期に入る。その中でどうやって力を発揮するか、ただ発揮すればいいのではなく、集団に対してどういうふうに自分が貢献するかを考えて、その子なりの力でできるようにする。3年生になると最上級生だから、2年生のサポートする、困っている人を助けるなど、もっと大人になって全体に関わる。学校という大きな集団と自分のかかわり。その集団がいろいろ活動していくことを見入ることができるかという大きな視野に立つ。そんなふうに進めてきたが、

この区分は、中1は5、6年生にくっついているので、考えなければいけない。

それから1〜4年生って学校が楽しいことは必要なのだが、純粹無垢なところから社会的なルールなどをしつけて筋をつけていくことも必要かと思った。さらにそれをキャリア教育で考えるとと言われるともっと難しい。

アドバイザー

石井先生の資料が大変よくまとまっている。これをキャリア教育が目指す子ども像にしたいのか。表の右側の「学習する内容」が、児童像、子ども像。だけど、キャリア教育って限定すると、もっと具体的なものじゃないと困るのか。求めているものがよくわからない。

事務局

その通り。中学年に「自分の持ち味を発揮し、役割を自覚する」という内容があるが、このあたりがキャリア教育としての目指す子ども像になるのではないか。野田先生の話の中に、中1はまず自分を見つめる。そして他人を認める。中2は個と集団のかかわりを意識して、何かに貢献をするような指導をする。それもキャリア教育に密接に関わるので、石井先生の「中1、自分のよさ、個性がわかる」とか「自他の違いを尊重する」というあたりの文言で目指す児童像にまとめられたらという思い。

アドバイザー

そういうレベルでまとめるのであれば、これはかなりよくできているので、これでいいと思うが。これは一般的な集団生活、学校生活における子ども像。勤労観とか職業観に関する子どもの意識も含めていかないと。キャリア教育の目指す子ども像にはこれだけでは済まない。子どもにどういう勤労観を持たせるかがこれにプラスされてこない。だから、教育委員会が何をやらせようとしているのか見えなくなる。ほかの部会がどういう形態で子ども像をつくらうとしているのか。

事務局

ほかの部会はここまで進んでいない。このキャリアの重視する指導項目が自立、勤労観、職業観、自己肯定観でまとまって、それぞれの単元名と実施時期をこのように表記していくという流れで、ほかの部会もやるという流れにまとまっている。だからⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期での目指す子ども像がどんな形態で、どんな表現でというのがここまで進んでいない状況。

アドバイザー

もう一つ私がどうしても引っかかるのが、一貫校のバージョンでやること。私はずっとそれだけ意識しないほうがいいと言っているのだけど、そのためにやっているという方向に路線がくる。そうだとすると、子ども像をわれわれが作っていいのか。やはり一貫校、たとえばそれぞれの学校が目指す子ども像というのは、教育目標があって、教育目標から落としてくるものだ。そうすると、われわれがボトムアップで持ってくるようなものじゃないかと。カリキュラムを作って、それを参考にという提供の仕方はできると思うが、子ども像ってちょっと違うのではないか。たとえば私たちが提案しても、新しい学校を作っていくうえでの大きな方針は、

その学校の校長先生始め先生が、地域の声等を聞きながら作っていくのだと思うが、そのときにその部分と整合しなくていいのか。子ども像はあまりこっちでいじらないほうがいいのではという気がする。この石井先生が作られたのはすごくよくできているが、問題はキャリア教育を一貫校が進めていくときの材料、視点になるのかどうか不安。カリキュラムそのものは提供すればいい。場合によってはほかの学校にも広まるかもしれない。

委員

一番右側の「学習する内容」。これは前に文科省が出した「キャリア教育推進の手引」の中の、小学校と中学校の構造図の中にあつたものを抜粋した。

委員

低学年は「自分の好きなことを見つけて楽しく学ぶ」が目指す子ども像でいいのかという気がしている。この右側が、キャリア教育を含めてそういった目指す子ども像なのか。

委員

この項目、学習する内容、このフォーマットは、四つの分科会共通なのか。

事務局

今のところ入れる予定だが、どの部会も悩んでいる。「全学習期を通じて学習する内容」って言われたら…。ある部会は、この欄は全学習期を通じているから、繰り返し何度もどの時期でもやるべき内容だという捉え方をしているところもある。だから表現力の部会は「全学習期を通じて学習する内容」というのは、語彙の力、言葉の力を全学習期通して指導する必要があるというふうな仮置きをしている。

委員

指導する内容か、ここは。「全学習期を通じて指導する内容」だったら、校内の安全とかそういう社会的なルールのなものも入ってくる。

事務局

そう。表記では、「学習する内容」になっているが、結局は裏表だから。

委員

指導する内容になると、子ども像とは重ならない。「身につける内容」というと子ども像になる。

アドバイザー

キャリア教育が目指す子ども像として一番右の欄を置き換えるなら、それはそれで通用する。それについて私たちがあんまり具体的に言ってもしょうがない。その例が、左側の指導する項目の中に生きてくればいい。だから1年生とか中学校のイメージがとかやってもしょうがない。これを目指して、左側の指導内容を検討すればといいと割り切って、考えるしかないのでは。

委員

この場では、一応「キャリア教育が目指す子ども像」というふうに言葉を置き換えた設定でまた話を進めたいと思う。

アドバイザー

もしこれでまずいのであれば、きちんとしたフォーマットを教育委員会のほうから出してもらいたい。たとえば子ども像は、ここにこういう中身で書けとか。学習内容については、共通して学習するものがあると考えているのだと思う。例えば、子どもの役割分担とか役割意識みたいなもの。班活動とかグループ活動的なものは、小学校1年生から中学校まで続いていくと思う。そういうものであれば、この右側はその種のフォーマットが入ると思う。

事務局

児童像と（2）の検討事項「全学習期を通じて学習する内容」は、この段階で預からせてほしい。

委員

では、芝田先生が作った3番の表の発達段階の特徴について。Ⅰ期は、「具体的な物を通して考える時期である」。Ⅱ期、「論理的・抽象的思考に移行する時期である」。Ⅲ期が、「着実に行う時期である」と、これはほぼ確定事項。さらに指導の重点に関しても、Ⅰ期は、「基礎・基本を繰り返して基本を学ぶ」というのも決定事項。だから、あくまでもこれはⅠ期が「基本を学ぶ」、Ⅱ期が「意欲的に学ぶ」、Ⅲ期が「応用して主体的に学ぶ」ということを意識して、左側も見なければいけない。だからキーワードが出ている。ここに通じるという視点を持つことだけは、きちんと考えていかなければいけない。あと「重視する指導項目」に関しては、四つでいいのか。

委員

「特別支援学級」という視点が、左側の三つとちょっと違うが、線を引いてしまえば。

委員

「キャリア発達に関わる諸能力」との関連は図らなくていいのか。たとえばこの中で、勤労観、職業観あたりは情報活用能力と重なるかと思ったが、人間関係形成能力に関する協力とか他者とかかわるところがちょっと薄い気もした。

委員

私もそこは不安がある。国立教育政策研究所のパンフレットはよくできていて、低学年、中学年でそれぞれ下に道徳とか特別活動とかいろいろな事例がある。われわれが集まって出し合った事例がいい実践事例だと思うが、今のような視点も当然出てくる。偏りがあるのではないかという不安もあるし、吟味していく必要はあると感じた。だから一つの視点として、左側の子ども像と関連させて、この子ども像を育てるために「この時期ではこういう実践がある」と

いうやり方は、説得力が出てくるかと思った。今、左と右の関連ができていない。

委員

国立教育政策研究所、21年3月の資料の話。「小学校におけるキャリア教育推進のために」という内容との関連性。この視点からだ、日常生活という視点になってしまうのか。切り口が特別活動、道徳の時間になってしまう。中学年以上になると総合、高学年になると外国語活動とどんどん加わってきているが、根本先生は、これをベースにということか。

委員

それももちろんだが、カリキュラムは諸能力を育てるためのものでもあるので、この部会でも最初に四つが基本で、人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力が出ていて、その中に二つずつ入っていたと思う。この中で、他者理解とか他者とかかわるものが薄いと思ったので。

委員

生徒指導研究センターから出ている。こちらのほうが先に出ている。四つの領域、そして能力説明のところにも各項目二つずつ出ている。「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」ということで、国から出ている内容も意識しなければいけない。情報活用能力だと、情報収集・探索能力、職業理解能力となっている。これも意識しなければいけないのか。

委員

漠然としていないか。キャリア教育だったのに、全教育課程みたいな感じに。全部網羅すると漠とするから、私たちはキャリア教育のことについて柱を立てて、流れを見ていけばいいのではないか。

委員

だからそれが、自立、勤労観、職業観、自己肯定観でいこうというのでいいのか。

委員

それで押し通してはだめなのか。そういうものを全部入れていくと、だんだんキャリア教育でこういうのでというのがずれてしまう。

アドバイザー

練馬区で実践したいキャリア教育のカリキュラム、という意味合いで作ってきた。これを今度、一般的なキャリア教育のレベルにもっていかうとすると、文部省から出ている資料に沿って作るしかない。とりあえず今年は、自分たちが実践してきたものの中からいいものを取り出して、ほかにも実践してもらえる、波及できるようなものを紹介していきましょうという趣旨だったと思うのだけど、一気に最終ゴールまで目指した話になってしまっている。そうになると、なかなか難しい。そのへんも含めて、教育委員会が今年のゴールがどこなのか。今の段階では、ある程度こんな感じで作って「実践が裏づけにあるから、こんなことを手始めにやってみたら

どうですか」という紹介ができればいいのではないか。ほかの部会との兼ね合いもある。みんなきちっと埋めて、今年完成バージョンに近いところまでもっていきこうとしているのか。

事務局

ほかの部会もだいたいこのようなトーンでまとめることになっている。だから今おっしゃったように、この会の最初の出発の段階のゴール、今年度はそういう形で構わないと考えている。

アドバイザー

キャリア教育のカリキュラムの前に何かつける。「これまでの練馬区の実践に見られるキャリア教育のカリキュラム」とか。要するに完成版ではなく、今までやってきたものの中から、これを広めるために紹介するというメッセージを送らないと、練馬区のキャリア教育が貧弱だと思われる。形よりはまずいろんなことをやっている実践があるから、それを落として紹介をして、それで区内のほかの学校にもどんどん紹介しようというもの。もちろん、一貫校は特に中心に考えてもらいたい。

事務局

現段階では8ページだが、実践例を入れていただきたいと考えている。

委員

ということは、練馬区で私たちが実践したい、紹介できる研究初年度のカリキュラム的なものでいいのか。「もうちょっと詳しくはこう」みたいな、先生方が持ち寄った内容が、アルファベットAで、「Aは何ページか前を見てください」みたいな。方向がだんだん見えてきた。

委員

流れを書き出してみた。出発点はキャリア教育。そこから枝分かれして、子どもの像。その柱としては、自己、他人。それぞれがある。二つ目として、今度自己と他人。これは線だと思う。三つ目に、自己と集団が柱かと思う。芝田先生の検討事項の(2)「通じる学習内容」というところで、三つの柱が枝分かれしていったら、(3)でカリキュラムなので、実践例で具体的にいくつか出てくる表にしたほうが表現しやすいというふうにして書いた。やっぱりできる限り上のほうは簡潔で、広がっていったところは実践例でまとまるといいのかと。この三つの柱というのは、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期、それぞれレベルが違うけれども、やはり押さえていくべきこと。第Ⅰ期のときに、個人と他人だけをやっているわけではなく、自己と他人という関係も当然やっているだろうし、自己と集団も意識させていると思う。Ⅱ期になったときも同じ。Ⅲ期でもそれぞれの柱で学ばせていく部分が違うと思う。

委員

今までの話を聞いて、次年度はある程度沿う形で実践を入れていかなければならない。全然違うとやっぱり説得力がないと思う。だから次年度はきっちりここまでが必要だと思うが、今年度すごくいい柱が立っているのだから、活かすとしたらコミュニケーション能力。練馬区の求める「豊かな人間性」でも、「異年齢集団での交流」が入っているから、「かかわりをはぐくむ」

という柱を入れていくと、次年度移行するときもやりやすいのではないか。

アドバイザー

キャリア教育は、広義で言うともものすごく広い概念だから、みんな入る。だからどこかで限定しないと、すべて網羅する。だから言った今コミュニケーション能力は、表現力の部会を出してくる。おそらくその核になると思うから、そうしたら結局、勤労観とか職業観を中心にやっていくのが一番わかりやすいのではないか。

委員

芝田先生が作ってくれた表を見て「知・徳・体」、「知」は表現力の育成部会が、「徳」の部分は心の教育、「体」は体力の向上の部会がある。じゃあキャリア教育は全部まとめた「生きる力」か。何かに絞っていかないことには、多岐にわたりすぎて難しいという感じをもっていた。来年度以降のことも考える根本先生の発想もすごくよくわかるし、望月先生の切り口も確かにそうだということなのだけれども。廣嶋先生の勤労観・職業観をもっと広げた概念にして、「自立」「自己肯定観」をもうちょっと小さくしておいた表のほうがいける気がする。

アドバイザー

場合によっては「勤労観・職業観」と「自立・自己肯定観」にして、その二本立てぐらいでやっていくほうが、やりやすくなるかもしれない。

委員

ではいま練馬区で実践したい、紹介できるカリキュラムみたいな感じの項目として、「自立・自己肯定観をはぐくむ」というような形も出ているが。

委員

概念としては、自立と自己肯定観って切り離さないほうがいいかと思う。

委員

そうすると隙間のあるところにちょうど埋まっていく。期ごとがかなり埋まってくるような。

アドバイザー

全学習期を通じて学習する内容というのは、たとえば特別支援学級のところで、「個に応じた学習」とか「一人一人の学力を伸ばす」とか、学校行事にかかわることは全学習期を通じて指導する。要するに自立をはぐくむ、自己肯定観をはぐくむ非常に重要な学習の場面じゃないか。学習期のところに子ども像を入れるのなら、「Ⅰ期」「Ⅱ期」「Ⅲ期」と書いてある下に子ども像を書き出したほうがわかりやすい。

委員

こうしてⅡ期を見ると、どうしても小学校6年と中学校1年で空間ができてしまう。だから一貫教育というところで、Ⅱ期としてこんなものはどうだ、ということをここで話し合っ

Ⅱ期の中学校1年と6年の接続辺りで、何か出せないかと思った。

事務局

そうだと思う。ただ、まず今年度については先生たちの持ち寄ったものを整理してというように形で、来年度に。

委員

小中連携の研究校が何か実践をもっていないか。

部長

上石中では、たとえば中学2年生の「自己肯定観を育む」にある「リトルティーチャー」は、中学1、2年生で、相手方は小学校全学年。そういう小中連携はほかにも結構やっていると思う。相互に何か益するものがこの中にうまく落とせれば。

アドバイザー

小中連携は、一つは子ども同士の交流、カリキュラムの交流、もう一つは教員同士の交流がある。この小学校と中学校を埋めるという観点から定番なのは、小中が隣接している学校で部活や行事関係を一緒にやるという事例がかなりたくさん出ている。

どちらかと言うと、子ども同士の交流で今までやってきたものを中心に書いていて、教師のかかわりまではいっていない。いずれそれは提言しないといけない。新しい一貫校にはおそらく小学校高学年も担任制を一部入れる。そうすると今までにない教師同士の関わりが出てくる。でもこの段階でそれをキャリア教育に落として入れるのは難しい。だから今年は今までやったものを整理して、来年、こんな指導計画も考えられるみたいなことを紹介して埋めていくのかという感じがする。

部長

たとえば「リトルティーチャー」は、小学校から見るとあこがれみたいなものができる。でも中学校のほうは、先生ってとても大変だがやる気とやりがいが出て、教えることがすごく大事だと気づく。自尊感情を生むと同時に、望ましい職業観を身につける格好の場だと思う。

「自立」と「勤労観・職業観」、「自己肯定観」というのがあったとする。「勤労観・職業観」というのは、望ましい勤労観、職業観であって、今持っている勤労観じゃない。今何となく思っている仕事とか働くというものよりステージの高いところに子どもたちを乗せたい。そのためには「育む」というよりは、むしろ知識とか考え方も含めて身につける場面になる。

アドバイザー

いい実践というのは、自立とか勤労観、職業観とか自己肯定観とか全部出てくる。

部長

内容ではなくて、子ども像という話でいくと、リトルティーチャーに戻るが、これはやればやっただけのやりがいとか充実感を、中学のⅢ期あたりはねらいとできる気がした。Ⅱ期の場

合は、希望とか具体的な希望をいろいろと見つける世代。Ⅰ期の場合には、あこがれみたいな自分の楽しみを十分に味あわせる世代かと。それが重層につながれば、この中の事例もある程度焦点化するという気はした。

委員

最初の段階でも、Ⅰ期は「楽しさ」「伝えて成長を実感する」こと。Ⅱ期はなかなかそっちにいかなかった。Ⅲ期は、応用して主体的に学ぶことを柱にという確認はできている。

部長

たとえば子ども像的なもので、キーワード的にⅠ期については「楽しみ」とか「あこがれ」になるとしたら、Ⅱ期は「夢から希望へ」とか。Ⅲ期になったら、「社会のかかわりでやりがいを求めて」とか。どさくさに紛れて作ってしまった。

アドバイザー

それは文科省が言っていないから、オリジナルになる。そうしたらほかの部会にも押し付けないといけない。

部長

そういうⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期に対してイメージするようなワードが出てくると思う。

アドバイザー

ほとんど無批判に小中一貫をやるところは、4、3、2で区切っている。だから最初は、なぜ4、3、2かと検討しただろうが、ついてくるところはほとんど検討していない。本当にこれで成果が上がったのかは、まだ実証されていない。とりあえず小中のギャップを埋めるという意味でこういう切り方がいいのかという感じになっているけど。

事務局

今までの話で石井先生の表をこうしたらよいのでは、という意見をいただいたので、確認したい。Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期のすぐ右に、目指す子ども像みたいなものを作る。それで目指す子ども像のそれぞれのⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期にキーワードをつけて、さらにその期の目指す子ども像を現段階で、全学習期を通じて学習内容に示されているものを整理して入れる。

委員

Ⅰ期は右側を見ると、低・中学年だけれども、これは一つにしてしまったほうがいい。

事務局

それで目指す子ども像の横に、3本のうちの2本を合体させた、「自立を促し、自己肯定観を高める」という1本目の柱がきて、その隣に「望ましい勤労観・職業観を育む」という二つ目がきて、それぞれの活動がその下に位置づいていくというイメージをした。

そのときに特別支援学級の内容をどういう形で表の中に入れようかと思ったのだが。たとえ

ば楕円のところを普通の四角の形にして表現すれば、2本の柱でいけるのかなど。どの位置にもってくるのか、特別支援学級の先生方お二人に聞かないと

それと矢印型、下の方がとがっているのが4本あるが、これを全部右側の「全学習期を通じて学習する内容」に入れる。かかわる力というのが全学習期を通じて必要とされる内容であれば、ここに入れる可能性はある。

アドバイザー

かかわりは入れてもいいが、すべての子ども像の中に出てきている。ストレートで「かかわり」という表現になっていない。やっぱりかかわりって重要。

部長

自立というと、生活の自立とか何とかの自立とかいろいろな場面で使われている。キャリア教育の場合の軸足を考えると、社会人として、職業人としての自立を育む。そのへんまで絞り込まないと。あくまでもキャリア教育で勝負をかけるわけだから。

アドバイザー

わかるが、そうすると生活習慣は入れにくくなる。私は今、芝田先生のイメージでだいたいまとまると思ったけど、一個だけ、「自立」と「自己肯定観」は、「自立」の方が大きい概念という感じがする。だから「自己肯定観を育み、自立を何とかする」という方がいい。自己肯定観は、その子その子が感じ取ることだから、小1でも出てくる。小1の自立は、やはり生活上の自立が中心になり、職業とかかわった自立は難しい。Ⅱ期とかⅢ期は自立を意識して、Ⅰ期は自己肯定観を意識したイメージで構成していったら。

委員

そうすると、この①のところは「自己肯定観・」で。2番のほうは「望ましい勤労観・職業観を育む」、また石井先生に宿題が出てしまった。

部長

先週、職場体験をやって、朝会で2年生にメッセージを送るために調べた。その中で東京大学で5年ぐらい希望学というのをやっている。それは、やりがいのある仕事に就いている人のことを調査すると、小さい頃に「こういうことをしたい」という職業をたくさん具体的にもっていた人の方が、現在その仕事に就いていなくても、充実感とかやりがいが非常に高いというデータを出した。職業体験でも希望のところに行けない子もいる。将来自分で懸命に希望に向かってやって、挫折して、それで軌道修正してまた希望の職業を見つけてまた挫折してという修正する力が、非常にその子どもに対してプラスに働らしい。だからこそ希望通りの人生なんて不可能だって言っているが、そういうことによってやりがいのある職業に就ける。それがこの希望学をやっている教授たちの一つの結論。職業観・勤労観は大事と言いながら、子どもたちは職業体験をやる。でもなれる人は3%から5%ぐらい。でもやらせる確たる根拠を彼らに訴えていかないと、職業体験は形だけ大人のまねをして終わりにしたくない。だから本当の職業観・勤労観の基盤になる考え方、思いを持っていないと上滑りをするという自分への自戒

で。だからたくさん希望を持つというのは、本当にそれをもって、絶望して、でももう一度見つけて、また徹底的にやっという繰り返しでしかない。そのへんがキャリア教育で持っているもいい考え方なのかと。そういう気持ちと奥底にないと、子どもたちに響かない。職場体験という形で、根っこにあるもっとがんばれ。というメッセージまでいかない感じがする。

委員

さっきのイメージワードは。

部長

I期は「楽しみ」とか「あこがれ」、「あこがれと夢」。それでII期を「夢から希望へ」。III期を「やりがいを求めて」。I期は「楽しみ」「親しみ」とか、何かここは変えないと。

委員

学校に入って最初に言うことは、「好きなことを見つけよう」「できることを増やそう」とか。

アドバイザー

とりあえずたたき台にして石井先生に埋めてもらって、それをまた検討すれば結構いいものができそう。何か今日は脈絡がないような議論をしている間に、何となく脈絡がしっかりしてきた気がしている。いつも石井先生にまとめていただいて申しわけないが、次回、もう少しまとまって出てきそう。それを細かく検討して修正すればよい。

今日確認できたことは、枠組みを作っていくことも大事だが、今年は私たちがやってきた紹介したい実践を世に出して、それをいろいろな学校にやってもらおう。とりわけ一貫校のカリキュラムには反映させてもらうという位置づけでよいと思う。このあと、実践のポイントみたいなものを先生方に作成していただくことになるだろう。そういう方向で仕上がっていけば。

*今後の日程：9月 15日（火）15時30分
10月 19日（月）15時30分
11月 9日（月）15時30分
12月 14日（月）15時30分